THE HEALING EFFECT OF THE WHOLE PERSON (HOLISTIC) MEDICINE "THE MEDICAL ART OF JAPAN"

KAZUO NITTA, M.D.
MOA Health Science Foundation
MOA TOKYO Joh-in Clinic

A human being is composed of body and spirit. The body is mortal and the spirit is immortal, and therefore, the essence of a human being is the spirit. Clouds of pollution in the spirit cause diseases exhibiting a wide variety of symptoms in the body. To keep a good health, clearing up the clouds in the spirit is essential, and therefore, we have been applying the Medical Art of Japan "Johrei" which was discovered by the late Mokichi Okada through divine inspiration to our daily medical practice in order to cure patients by purifying their spirits. During Johrei, the practitioner focuses the energy radiating from the palm of the hand towards the body of the receiver, without actual physical touch. By such a simple procedure, the clouds in the spirit of patients are cleared resulting the healing of diseases. This is neither religion nor occultism but superscience. By Johrei we have led a number of patients to a healthy life. Out of lots of cases, a few examples are presented here.

The effect of Johrei on AIDS: This is the study which MOA consigned to Dr. B. Bihari, Medical Director of Foundation for Integrative Research, New York, N.Y. Four patients suffering from HIV infection were treated by Johrei 5 times a week for 12 weeks without medication. In all the patients, not only their general physical and mental condition but also their immunological signs were markedly improved to normal standards including CD4 values, number of $CD4^+$ T lymphocytes, production of interferon alpha, and mitogen response of lymphocytes. NK cell activity was promoted in 3 patients but lowered in the other one patient.

The effect of Johrei on atopic dermatitis: A male patient, 2 years and 9 months old, suffered from extraordinarily severe atopic dermatitis. Severely itchy eruptions fused together and spread over the entire face, which became exudative, hemorrhagic and suppurative. They appeared even in the oral and nasal cavities and conjunctiva. He received thorough and frequent Johrei and natural foods. His atopic dermatitis was healed over a period of as short as 4 and a half months without any medication. No relapse has occurred thereafter.

Statistical healing rate of atopic dermatitis: We took statistics on the healing rate of atopic dermatitis. The 89 cases treated by Johrei combined with natural food were the whole patients suffering from atopic dermatitis in our MOA TOKYO Joh-in Clinic for the period of 2 years, and the 80 control cases treated by conventional medication were the atopic dermatitis patients extracted by random sampling for the same period of time in Inoue Hospital, Tokyo. The healing rate on the patients younger than 5 years old was 92% and 42% in the Johrei plus natural food group and in the control group without Johrei nor natural foos, respectively. The healing rate on the patients older than 6 years old was 87% in the Johrei plus natural food group and, in contrast, it was only 10% in the control group.

As shown above, the Medical Art of Japan, Johrei, has a remarkable healing activity, which results from the cosmic energy. The Johrei's energy emanates from the palm of the Johrei practitioner as a kind of radiation wave "spiritual wave" and when the wave hits a receiver, its intermediary particles which I call "spiriton" bestow the energy on the receiver's spirit to purify it.

We have been, on the one hand, collecting the clinical data on the effectiveness of Johrei treatment and, on the other hand, carrying out various physicobiological experiments for Johrei energy.

全人的医療「日本医術」の治病効果

新田和男
㈶エム・オー・エー健康科学センター　専務理事、研究部長
ＭＯＡ　ＴＯＫＹＯ浄院診療所所長

緒　言

人間にとって極めて重要であり、最大の関心事は健康である。如何程財産があり地位や名誉が高くとも病床で苦痛にあえいでいたら人生の意義は色あせたものになってしまう。昔から非常に多くの人がいろいろな病気に苦しみ、死の恐怖に悩まされてきた。この苦悩から免れんために人間は知恵を絞り、医学を発達させ幾多の医療方法を開発してきた。電子工学や光学技術の著しい進歩などと相まって、診断面においてはコンピューター断層撮影（ＣＴ）、高速らせんＣＴ（SpiralＣＴ or Helical ＣＴ）、核磁気共鳴画像診断（ＭＲＩ）、核磁気共鳴血管造影（ＭＲＡ）、超音波画像診断（ＵＳＩ）、内視鏡検査、血管造影、シンチグラフィー、生化学的診断、免疫学的診断等、また、治療面においては化学療法、免疫療法、外科手術手技の進歩、内視鏡的手術、レーザー光焼灼術、重粒子線照射、管内放射線照射（ラルストロン等）、腎人工透析、心拍ペースメーカー埋没、臓器移植、高栄養輸液（ＩＶＨ）、電解質管理等、更には分子生物学の進歩とともに遺伝子診断、遺伝子治療など、現代科学の粋をつくした至れり盡くせりの理論と方法が提供されている。これ程進歩した現代医学をもってすれば、病気や病人はどんどん減ってもよい筈であるが、現実はどうであろうか。病気の種類も病人の数も逆に激増しており、1995年現在、国民医療費は２６兆円を越えている。これは一方では、これだけ進歩発達した西洋医学も万能ではないことの証左であり、また他方では、どこか真理に外れたところがあるからではなかろうか。元来、生物には生体防御機構とか自然治癒力なるものが備わっており、これらを増強して治癒に導くのが自然なのであるが、現代医療は時には逆にこれらを低下させつつ物質的に、あるいは機械的に病気を強引にねじ伏せるといった観が強い。そのための医療による害も時には軽視できない。現代医学の成果は瞠目に値するが、一方、現代医学は物質偏重に流れ、患者を治すよりは病気を治すといった傾向が強く見受けられる。しかし、それは本物ではない。私も約半世紀の長きに亘り、化学療法、殊に癌の化学療法、免疫療法の研究に心血を注いで来た。共同研究ではあるが、新しい抗生物質も幾つか世に出したし、治療法の開発でも聊か貢献してきたと自負している。しかし、その献身的努力にも拘らず、現代医学ではどうにもならない患者に遭遇するたびに、現代医学の非力さをいやという程痛感させられた。こういったことがらを反映してか、最近、全人的医療に対する関心が少しずつ高まり、ギリシャのヒポクラテス医学、V.E.フランクル博士のロゴセラピー、インドのアーユルヴェーダ、東洋医学、気功などの研究が盛んになってきたことは周知の通りである。従来はオカルトだとか非科学であるとして否定されてきた目に見えざる力の研究が真摯に広まりつつあるのは、一部の科学者が自然の偉大さと大切さを素直に認め、自然界の現象の中には現代の唯物的科学では説明のつかない現象が幾らでもあることを知り、そして唯物科学の枠に囚われずにそういった現象の解明をも科学の範囲として真理を探究することこそ真の自然科学者の執るべき態度であることを覚ったからであろう。「私達は海浜の美しい貝殻の一つ一つを真理として拾い集めているけれど、本当の真理はその

向うに無限に広がる大海にあるのだ」と言った偉大なる物理学者アイザック・ニュートンの謙虚な言葉を私は想起する。

上に述べた各種医学とは全く独立に、わが国に於ても岡田茂吉師が60年以上も前に、現代医学の物質偏重の誤りを指摘し、人間の本質は霊であることを喝破し、西洋医学、東洋医学の長所を取り入れつつ、霊と体との両面から病人を治療する日本医術浄霊を発見した。この日本医術浄霊の力は宇宙エネルギーであり、その治病力は抜群である。何も物を用いず、患者の体にも触れず、ただ患者に向って手を翳すだけであるが決してオカルト的なものではなく科学である。われわは以前からこの日本医術浄霊を診療にとりいれ、非常に多くの病人を健康体へと導いてきた。数多くの優れた成績の中から最近のエイズの例とアトピー性皮膚炎の例を報告し、日本医術浄霊についての考察を加えたい。

エイズに対する浄霊の効果

本研究はニューヨーク市のB.ビハリ博士の申し出によって、厚生省管轄の財団法人エム・オー・エー健康科学センターが同博士に委託した研究である。

実験方法：概略を表１に示す。年齢28～45歳のＨＩＶ感染者４名を被験者とした。被験者は実験開始の前と後それぞれ３ヵ月以上薬物治療を行なわず、また以前に浄霊を受けたことはない。浄霊はＭＯＡの浄霊士によって実施され、被験者のうち３人は週に５回、１人は週に３回受け、12週間継続した。全員勤め人であったが、１回の欠落もなく総べて予定通り浄霊を受けた。実験開始直前と開始後４週、８週、12週の実験終了直後の計４回、問診、視診、打診、聴診、体重測定、バイタルサインのチェック、尿検等の身体検査を行ない、開始直前、開始後４週と終了直後には、これに加えて血球計算一式、血球の種類の算定、血液化学検査、免疫学的検査、血清中のαインターフェロン定量、ナチュラルキラー（ＮＫ）細胞のＨＳＶ細胞、Ｋ５２６細胞に対する傷害活性、リンパ球のマイトジェンに対する応答活性、血漿中と末梢白血球中のＨＩＶの検定を実施し、これらの結果を比較検討した。

実験結果：概略を表２に示す。被験者全員が体調が良くなり大変元気になった。副作用は何も認められなかった。血清のＣＤ４値は実験開始前は平均３６５であったが、12週間の浄霊後は平均４５１と24％も上昇した。末梢血中のリンパ球の中でＣＤ４$^{+}$ リンパ球の数の割合は開始前は平均25.3％であったのが12週の浄霊後は平均31.5％と25％も上昇した。ＨＩＶ感染者の臨床治療実験でプラシーボ効果によるＣＤ４の上昇は高々８～10％であるので、浄霊実験でのＣＤ４値の24％上昇、ＣＤ４$^{+}$ リンパ球比率の25％上昇はプラシーボ効果によるものではない。αインターフェロンの産生もＨＩＶ感染者では低下しており、本実験でも血中レベルは当初平均250IU/mℓであったのが12週の浄霊で平均1,000IU/mℓと300％の上昇を示した。ＰＨＡ（Phytohemagglutinin）によるリンパ球のマイトジェン応答（若返り反応）も促進係数が当初平均55.9と低下していたのが１２週の浄霊で175.7と214％も上昇した。これらの成績は免疫賦活剤レンチナンよりも優れた成績である。ＨＳＶ細胞およびＫ５２６細胞を標的としたナチュラルキラー（ＮＫ）細胞の活性をしらべたところ、４人の被験者中、３人が当初平均20％という活性の値が12週の浄霊で平均25％と、25％の上昇を示したが、残りの１人が50％も低下したために平均すると有意の差がない結果となった。ウィルス血症は12週間の浄霊では有意の変化はなかった。興味あることには、

表１．エイズに対する日本医術浄霊の効果の実験方法

実験実施者：Bernard Bihari, M. D.
ニューヨーク州立大学健康科学センター準教授
総合研究財団医学部門長、ニューヨーク市

被験者：４名（男性３人、女性１人）のＨＩＶ感染者、
年齢：28歳～45歳、　　職業：勤め人、
薬物治療：実験開始前、少なくとも３か月間および開始後、少なくとも12週間は薬物治療なし。
以前に浄霊を受けたことはない。

浄霊：３人は５回／週、１人は３回／週、12週間継続。１人の脱落もなし。
被験者は浄霊実験期間中も通常どおり勤務。

検査項目：一般状態、身体検査、血算一式、血液化学検査、免疫学的検査、血清中のαインターフェロン量、ＮＫ細胞活性(HSV細胞、K526細胞に対する傷害活性）、リンパ球のマイトジェン応答、
血漿中と末梢白血球中のＨＩＶの検定、

検査回数：研究室検査は実験開始直前、４週、１２週に実施、
他の検査は開始直前、４、８、１２週に実施。

表２．エイズに対する日本医術浄霊の効果の実験結果

Ａ．一般検査

一般状態：全員が元気になり体調が改善された。

副作用：本質的に副作用は認められない。
１人は短期間下痢があったが駆虫剤で良くなり、他の１人は体重が５ポンド(2.25 kg）減少したが、これらのことはＨＩＶ患者に共通してみられることなので浄霊の副作用とは考えられない。
血算の所見や血液化学検査で浄霊の毒作用は何もなかった。

Ｂ．特殊検査

ＣＤ４値：平均３６５→平均４５１（２４％↑）
ＣＤ４$^{+}$ リンパ球数／全リンパ球数：平均25.3%→平均31.5%(25 %↑）
αインターフェロン：平均250IU ／mℓ→平均1,000IU ／mℓ（300 %↑）
リンパ球のマイトジェン応答：ＰＨＡで促進された。
促進係数：平均55.9→175.7（214%↑）
ＮＫ細胞活性：ＨＳＶ細胞とＫ５２６細胞をターゲットとして
３患者で平均２０％→平均２５％（２５％↑）
１人の男性患者で５０％↓
平均すると変化なし。
ウィルス：血球中および血漿中のウィルスに有意な変化なし。

Ｃ．特殊ケース

１人の患者は実験終了後、転勤のため５週間浄霊が受けられなかった。
そのためにＣＤ４値およびＣＤ４$^{+}$ リンパ球比率は
ＣＤ４：（実験前）383 →（12週）519 →（浄霊なし５週）360
ＣＤ４$^{+}$ リンパ球：（前）20%→（12週）32%→（浄霊なし５週）26%
他の３患者は実験期間終了後も浄霊を継続し、高値を維持。

１人の被験者はＣＤ４値とＣＤ４$^{+}$ リンパ球比率が実験開始前はそれぞれ３８３および２０％と低値だったが１２週の浄霊でそれぞれ５１９および32％と正常にまで回復した。しかるに、12週間の実験終了後、個人的理由で５週間浄霊が受けられなかったところＣＤ４値とＣＤ４$^{+}$ リンパ球比率はそれぞれ３６０および２６％と再び低値に戻ってしまった。実験終了後も引き続き浄霊を継続して受けた他の３被験者が高値を維持したのに比し顕著な対照を示した。

考察：体液性免疫と細胞性免疫との起始点ともいうべき要の座を占めるＣＤ４$^{+}$ リンパ球（ヘルパーＴリンパ球）がＨＩＶの主なターゲットであり、ＨＩＶの感染と増殖によってＣＤ４$^{+}$ リンパ球がどんどん破壊されていく。従ってＣＤ４$^{+}$ リンパ球の数と可溶化ＣＤ４抗原の量とはエイズの進行度のマーカーとして最も適切であり、世界的に採用されている。今回のこの研究は被験者が４人という少数なので決定的なことは言えないが、12週間の浄霊を受けた被験者全員が明らかにプラシーボ効果でないだけのＣＤ４値およびＣＤ４$^{+}$ リンパ球の増加を示し、しかも引き続き浄霊を継続した３人は、いずれも高値を維持したのに、浄霊を中止した１人のみは元の低値に戻ってしまったという事実はエイズによるＣＤ４$^{+}$ リンパ球（ヘルパーＴリンパ球）の破壊を浄霊が防ぎ且つ回復させたといえそうである。そうなれば当然、免疫能は高まるわけで、αインターフェロンの増加やＰＨＡによるリンパ球のマイトジェン応答の増強はそれを裏付けている。ＮＫ細胞の活性も免疫力のパラメーターとして屢々採用されるが、今回浄霊によって３人はＮＫ活性が増強したのに１人は低下したのは何故なのか理由は不明である。不可解なのはＮＫ活性の低下した１人はαインターフェロンが増加しているにも拘らずＮＫ活性が低下したという矛盾である。若しかするとＮＫ細胞にサブクラスがあるのかもしれない。ウィルス血症は消失しなかったが、浄霊の期間が12週という短期であったがためで、長期間浄霊を継続すればウィルス血症も消失するかもしれない。その場合、浄霊の直接の作用によるＨＩＶ消失と、免疫力を主とする抵抗力の増強によるＨＩＶの消失と２つのケースが考えられる。以上を総括すると、浄霊にはエイズによる免疫低下を防ぎ免疫力を増強する作用があると言えそうであり、ひいてはエイズを治癒させる作用が期待される。被験者の数を増やし、長期に亘る研究が必要である。

アトピー性皮膚炎に対する浄霊の効果

アトピー性皮膚炎、殊に乳幼児のそれは浄霊が大変よく奏効する疾患の一つである。乳幼児のアトピー性皮膚炎は浄霊と自然食で短期間で治癒する。顕著な１例を提示する。

症例：患者の家族歴、既往歴、現病歴、を表３に示す。患者の父母ともに曽って重症湿疹があり、姉２人にもアトピー性皮膚炎があって、当該患児にはアレルギー素因が濃厚に存在する。生後９か月頃より突然湿疹が出はじめ、浄霊のみで11か月足らずで治癒している。その後１年１か月経った1990年12月28日に38.5°の発熱で発病した。２日後の12月30日に顔に赤い発疹が出はじめ、発疹の局所は熱を持ち、とてもかゆかった。全身にも40°という高熱を発した。通常、アトピー性皮膚炎は高熱を伴なわないので、猩紅熱、麻疹、丹毒などとの鑑別が必要であるが、発疹の状態等から、これらの疾患とは鑑別された。エリテマトーデスとも、また通常の湿疹とも異った。食欲不振で固形物を食べないので水分補給のため自然農法産のスープとジュースを飲ませ、日本医術浄霊を徹底した。12月31日より発疹は相互に融合し始め、1991年１月４日頃には顔全体に拡がり、かゆさが益々激し

表３．アトピー性皮膚炎に対する浄霊の効果の一例

患者：高張総一郎、男性、１９８８年３月１０日生（２歳９月）

家族歴：

父：生後１年迄重症湿疹、１８～１９歳首から上の湿疹で化膿。浄霊のみで治癒。

母：１０歳迄重症湿疹、医薬によって治らず、浄霊で急激に治癒。

姉：２人ともアトピー性皮膚炎、浄霊と自然食でほとんど治癒。

既往歴：正常分娩（自宅）。生後９ヶ月頃（1988年12月23日）より、突然背中に湿疹、全身に拡がる。生後１年８月（1989年11月）に発熱し、水様下痢とともに湿疹は治癒。浄霊のみ。医薬は用いたことがない。

（実名での発表は患児の母親の承諾を得ている）

現病歴（病気のはじまりと経過）：

1990年12月28日：発熱 38.5 ℃

12月30日：顔に赤い発疹と局所熱、かゆい。体温40℃
食欲不振、固形物を食べない。水分の経口補給（自然農法産のスープとジュース）
日本医術浄霊

12月31日～1991年１月８日：
発疹は相互に融合して顔全体に拡がる。益々かゆく、滲出性、出血性、化膿性となる。部分的にかさぶたを形成。
浄霊と自然食（スープ、ジュース）を継続。

１月９日、10日：かさぶたが剝れたあとに白い外見上健康な皮膚が出現。
浄霊と自然食（スープ、ジュース）を継続。

１月12日：食欲が回復し、著るしく旺盛となる。

２月７日：殆んど治癒。治癒状態は約１か月続いた。

３月11日：再発。症状は前回よりは軽く、一般状態も良く、元気で食欲も良好。２か月以内に治癒。その後、再発していない。

くなった。滲出性、出血性、化膿性となり、部分的に痂皮を形成。このような状態が８日頃まで続き、眼からも血膿が出、それが固まって眼も開かない状態であった。熱は既に下ったが固形物は食べられず、浄霊と自然食のスープ、ジュースをずっと継続した。８日、９日頃より、痂皮を無理に剝がすと出血したが、ひとりでに剝がれると、剝がれたあとに白い外見上健康な皮膚が出現した。１月12日には昼に「おつゆごはんを食べたい」と言い13日ぶりに固形物を食べ、食欲が急速に旺盛となった。１月17日以降、どんどん回復し、２月７日には鼻孔から少量の血膿性鼻汁が出ているものの殆んど治癒した。治癒状態は１か月余り続いたが３月11日に再発した。しかし症状は前回よりは軽く、一般状態も良く、元気で、食欲もあった。浄霊と自然食で２か月位で治癒し、その後、再発していない。

考察：アトピー性皮膚炎はしつこい慢性疾患である。乳幼児のアトピー性皮膚炎は年長児や成人のそれに較べればまだ治り易いが、それでも早くても２～３年はかかる。副腎皮質ステロイドがよく奏効するが、長期使用すると免疫力が低下したり、骨粗鬆症を生ずる。一方、ステロイド使用を中止すると再発する。しかるに、日本医術浄霊と自然食との併用による治療はアトピー性皮膚炎に対して極めて有効で、殊に乳幼児の場合には短期間で治癒させる。時には２～３年かかる場合もあるが多くは１年位、軽症の場合には数か月で治癒する。本症例は５か月弱で治癒しているが、本症例のような重篤なアトピー性皮膚炎が僅か５か月で治るということは一般には極めて稀なケースである。極めて稀ではあっても事実は事実であり、浄霊と自然食ではこれに近い症例は少なからずあり、必ずしも極めて稀とは言えないのである。本症例では両親が執着を取り去ったことと、浄霊に対する強い信念を持ち続けていたことも良い影響を与えたものと思う。

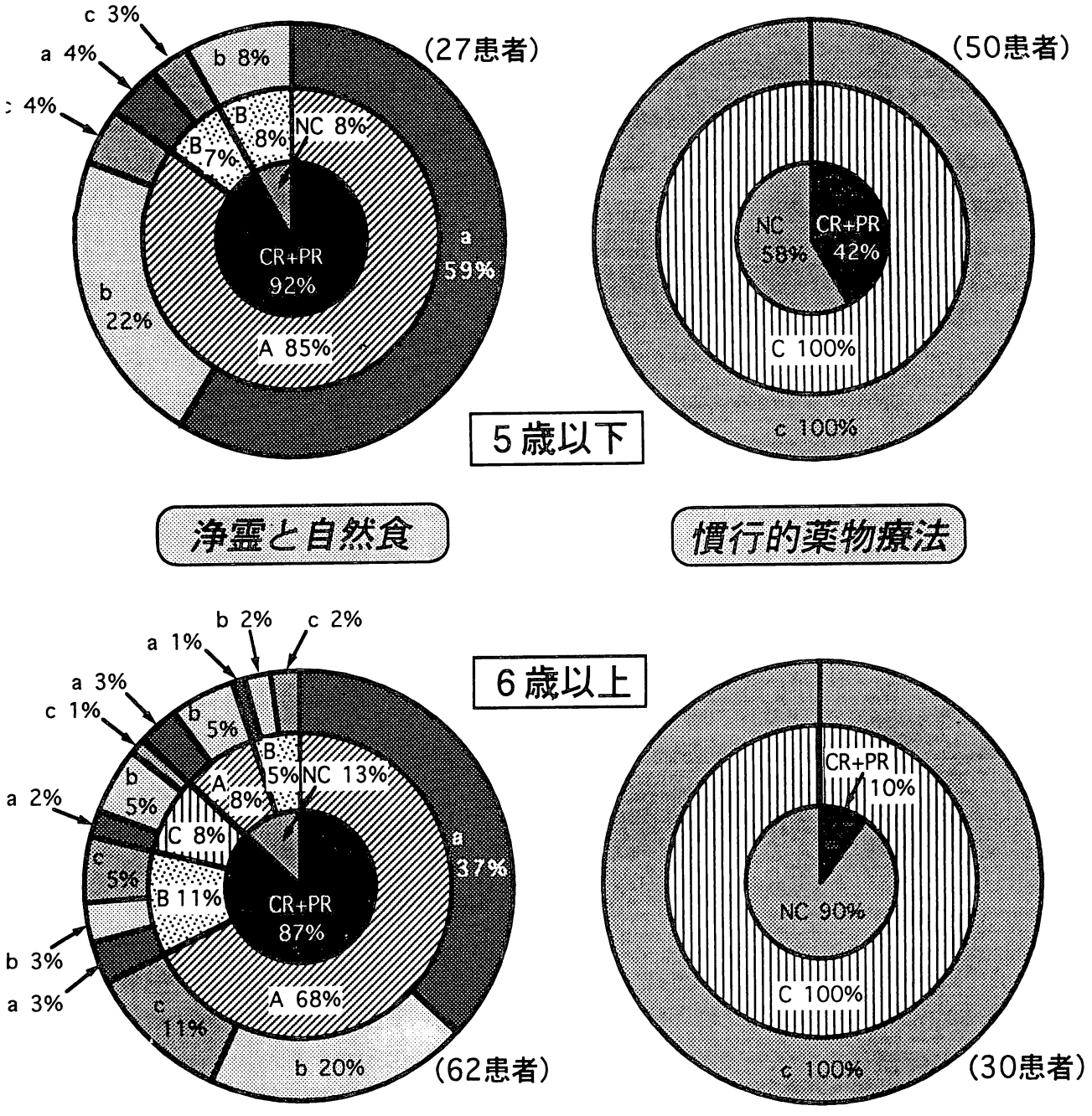
アトピー性皮膚炎に対する浄霊の効果の統計

上記の症例を機に、MOA TOKYO 浄院診療所におけるアトピー患者の治癒率の統計をとった。但し、浄院診療所の症例は殆どが浄霊と自然食との併用療法であるので、浄霊のみの単独のデータではない。

方法：1991年４月にMOA TOKYO 浄院診療所開設後２年間のアトピー性皮膚炎の全症例89例を５歳以下と６歳以上に分けて集計した。５歳と６歳の間で分けたのは、乳幼児は慣行の薬物療法でも治癒率が高く、年長児や成人では治癒率が低いという事実と、６歳になると就学して学校給食のために自然食の率が減るためとによる。自然食も摂らず、浄霊も受けずに薬物療法で治療した対照群は浄院診療所では得られないので、東京の井上病院の小児科部長でアレルギーを専門とする千葉医師に、浄院診療所の症例と同期間の井上病院アトピー患者の中から全く無作為に８０例を抽出してそのデータを頂いた。観察期間は２年以上である。効果の判定は完全治癒して２年以上再発のないものをＣＲ（Complete Response)とし、治った後、再発があったが極めて軽度であって実質的には根治とみなし得るものをＰＲ（Partial Response）とし、ＣＲ＋ＰＲを有効とした。変化がなかったものはＮＣ（No Change)とし、無効とした。

結果：結果を図に示す。図中三重円の最内部の円は奏効率を示す。中間の輪は自然食の摂取率で、Ａは自然食を摂る割合が70～90％以上、Ｂは50％、Ｃは30％以下を示す。最外側の輪は浄霊を受けている頻度で、ａは浄霊を毎日受けた症例、ｂは週に２～３回、ｃは浄院診療所に来た時だけしか受けないか、または全く受けない症例の％である。左上図は浄霊＋自然食の５歳以下の場合であるが、浄院診療所の５歳以下の患児は全員がわれわれ

アトピー性皮膚炎における治癒率



内円：効果	A：自然食利用　70～90%以上
中円：自然食利用頻度	B：　50%
外円：浄霊頻度	C：　30%以下
CR（完全緩解）	a：浄霊頻度　毎日
PR（部分緩解）	b：　週2～3回
NC（未緩解）	c：　浄院診療所のみ

の指導通りに自然食を摂ってくれ、殆どが浄霊をよく受けており、浄霊を余り受けない者は７％であった。この群の浄霊＋自然食の治癒率は92％であった。これに対して右上図に示す５歳以下の慣行的薬物療法群では治癒率は42％であった。６歳以上になると浄霊＋自然食群の治癒率は左下図に示すように87％であるのに対し、薬物療法群では右下図に示すように治癒率は10％であった。

考察：乳幼児のアトピー性皮膚炎は比較的治りが良いことは知られており、本統計でも井上病院の５歳以下のアトピー患児は薬物療法で治癒率は42％と、かなり高率であったが、薬を用いず、浄霊と自然食のみで治療した場合は治癒率が92％と断然優れた成績である。年長児や成人のアトピーは難治で、殊に成人のアトピーは治らないと言っている医師もいるくらいである。そしてそのように、６歳以上のアトピー患者の治癒率は井上病院での薬物療法では10％であったが、MOA TOKYO 浄院診療所での薬物を一切用いず、浄霊と自然食とでの治療では治癒率87％という驚異的な高率であった。本統計には推計学的に有意差検定を施していないが、これだけ確然たる相違があれば、その必要はないであろう。また。母集団にしても浄院診療所の症例は開設後２年間の全症例であり、井上病院の症例は該当する期間の患者の中から全く無作為に抽出した標本であって、いずれの場合もセレクションなどはかかっていない。この統計結果と、経験から、アトピー性皮膚炎は日本医術浄霊と自然食によって、通常の薬物療法によるよりも遙かに高率に、しかも短期間に治し得ると結論できると思われる。

日本医術浄霊について

日本医術浄霊の治病効果について述べたが、それでは浄霊とは一体何なのか。その方法と原理について簡単に述べたい。

浄霊の方法：ＭＯＡの創始者である岡田茂吉師が天啓を受けて書いた「光」という文字を、通常はペンダントのようにして身につけて、患者に向って手を翳すだけである。被術者は何の資格も条件もいらない。浄霊を信じていなくてもよい。浄霊なんて効くものか、インチキだと思っていてもよい。施術者は岡田茂吉師の書いた「光」という字を身につけるだけで実施できる。被術者と施術者との距離は通常は50cmないし１ｍ位が適当である。浄霊中はなるべく雑談はせず、施術者は無心に、力を抜いて気楽に手を翳す。気張ったり意気込んだりしない。初心者の兎角犯しがちな誤りは、患者が親しい人であったり、病状が重篤で苦しんでいたりすると、つい、「早くなんとかして上げたい」とか「何としてでも良くならせたい」という強い気持で浄霊をすることである。人情から言ってそう思うのは当然であり、強く思念することは良さそうにみえるが、浄霊をする時は無念無想で力を抜いてやるのが良いのである。浄霊には急所の部があり、前額部、頭頂部、後頭部、側頸部、肩、腎臓部、腋窩、鼠蹊部などであるが、その他、有熱部、腫脹部、患者が苦痛を訴えている部は特に念入りに施術する。浄霊の時間は30分ないし１時間位が普通だが、健康な人はもっと短くてもよいし、重症の場合には長時間、あるいは頻回に施術した方がよい。一般に重症や難病の場合には徹底した浄霊が必要になる。通常は前面をやってから背面をやるが、その逆のことも、或いは場合によっては前面だけとか背面だけということもあり得る。また、患者の状態によっては横臥して受けてもよい。副作用は全くないが、時によっては浄霊により一過性に症状が強くなる場合がある。それは浄霊のエネルギーを受けることによって浄化力が強くなるための現象で、患者がそれに耐えられれば浄霊を続けた方

が早く良くなるのであるが、耐えられない場合とか、衰弱するような場合は、一回の時間を短くして何回にも小分けにして実施する。原則的には患者の身体に手を触れない。いやがる人、拒否する人に無理に強制してはいけない。また、自分で自分に浄霊することもできる。

浄霊の原理：浄霊は現代科学では唯物論者を納得させ得る説明はつけられない。しかし、浄霊は宗教ではなく２１世紀の科学であり超科学である。現代科学がまだそこまで達していないから説明できないまでのことである。岡田茂吉師の説明によれば、宇宙を創り宇宙を支配している最高次の実在、すなわち、宇宙の創造主が岡田茂吉師と合一して、この創造主の宇宙エネルギーが岡田茂吉師の書かれた「光」という字を身につけた施術者と岡田茂吉師との間の霊線を通じて施術者に授けられ掌から対象に向けて放射されるのだという。すなわち、浄霊のエネルギーは宇宙創造主の宇宙エネルギーであり、絶対力なのである。浄霊施術者の掌から放射される浄霊のエネルギーは電磁波や重力波のように一種の波となって被術者に放射される、岡田茂吉師はこの波動を霊波と呼ぶ。電磁波や重力波は波動であるが、これらが対象物と相互作用する時にはそれぞれ光子、重力子という媒介粒子の性質を呈してエネルギーを与える。同様に浄霊の霊波も波動として伝搬されるが、対象物に当たって相互作用する時には霊子（私はSpiritonと名付けた）という媒介粒子の形でエネルギーを伝えると思考する。

岡田茂吉師は「人間は霊的な存在であり、肉体と霊とが合体して生きた人間となる。肉体は条件が悪くなれば滅ぶけれども霊は永遠に滅びない。故に霊こそ人間の本質であって、肉体は霊を容れる器なのである。故にこのことを端的に霊主体従という。しかし、肉体は二の次というのではなく、肉体もまた大切であって肉体が駄目になれば現世に生存することはできない。霊と体とは相互に反映し合っており、この意味で霊体一致ともいう。霊と体とは合体しているが、霊は霊界に属し、体は現界に属する。」と教えている。岡田茂吉師はまた、「現代医学の進歩は素晴らしいけれども、唯物医学のために体にのみ注意が注がれ、肝腎な霊のことは無視されている。体も勿論大切ではあるが、人間の本質は霊なのだから、病気もその源は霊にあるということに現代医学は気がついていない。現代医学がこの事に気がつかない限り、いかに物質医学が進歩しても、霊の容れものである体の破損と修理の繰り返しであって、永遠にこの世から病気をなくすことはできない。悪い想念、悪い言葉、悪い行為などによって、知らず識らずの間に霊に曇りが生ずる。霊の曇りが或る程度ひどくなると、自然の摂理によって、霊を浄めるためにその曇りが解けて排除される。これを浄化という。霊と体は反映し合っているから、霊に曇りが生ずると体には毒素が生じ毒血となったり毒の固結となって肩や頸の凝りなどとなってあらわれる。毒の塊りを解かし易くするために熱が発生し、この解けた毒や毒血の刺激によって各種の痛みが生じたり、その排除のために痰や嘔吐や下痢などの症状が出る。現代医学はこの浄化の本質を理解していないからこの浄化の症状のみを捕らえて病気とみなし、この症状を止めることに専念する。しかし、この浄化の意味を理解すれば浄化の終わったあとにはそれだけ霊的には曇りが除かれて浄まり、体的には毒素が排除されて健康になることが分かる。勿論、脱水状態や衰弱などには充分注意を拂う必要があるが、むやみと症状を止めることは浄化の停止であって病気の治癒ではないのである。病気というものは霊の浄化なのであって、本来はありがたいものであるが、各種の病気の症状は人間にとって苦痛であり、時には生

命が危険なことすらある。そこで、そのような苦痛なしに霊が浄められればそれに越したことはないわけで、その方法が日本医術浄霊なのである。」と教えている。日本医術浄霊はこのように苦痛なしに、或いは既存の苦痛を軽減し、霊を浄化して真の健康体を作る「浄化療法」である。霊もまた霊子の集合体と考えるならば、霊の曇りは浄霊波の霊子のエネルギーによって、丁度レーザー手術において癌などの組織がレーザー光で蒸発してしまうように破壊されてしまうか、或いは、曇りの部分だけが除去されてしまうか、或いは浄霊波に同調する清い霊子だけが選別されるかなどして霊が清まるということもあり得るであろう。電磁波と光子の存在は理論的にも実験的にも証明されており、重力波と重力子は理論的には存在が認められているが実験的にはまだ発見されておらず、世界中の実験量子物理学者が懸命に発見に努力しているという。重力波と重力子が実験的に証明されるのが20世紀の末か21世紀前半ではないかと推測する。その次に霊波と霊子の存在を物理学者か電気工学者が理論的ならびに実験的に研究し、証明して呉れることになると思う。岡田茂吉師が浄霊を21世紀の科学と言ったのはこの辺のことを指したものであろう。ただ、電磁波、重力波、光子、重力子は現代物理学の法則に従っているが、霊波と霊子は現代物理学の法則に従っていないので、同列に並べることはできないかもしれない。別の次元の考え方をしなければならないかもしれない。

浄霊治癒の症例集積と物理学的・生理学的実験　－結辞にかえて－

形而上的な目に見えない力を形而下的な理屈で説明することは殆ど不可能であり、そのために浄化療法としての日本医術浄霊の素晴らしい治病効果を説いても、大多数の科学者からは或いは宗教と冷視され、或いはオカルト的と誤解、蔑視されるのが一般である。しかし、浄霊は宗教ではなく飽く迄も科学であり、超科学なのである。唯物思想に凝り固まった頭の固い科学者にこのことを理解させることは極めて困難ではあるが、理解して貰わねば世の中は何時まで経っても良くならない。幸にも頭の柔らかい科学者もいて、最近では唯物偏重から生じた自然環境の破壊に警告を発し、心の大切さを説き、患者のＱＯＬを重んじ、目に見えないものに対してオカルト的好奇心でなく真摯に研究する学者、研究者も少しずつ増えて来た。われわれも浄霊の力をできるだけ科学的に立証するために次の２つの方針をとっている。１つは医師が納得する症例データを集積することである。問診や物理的診察所見だけでなく、Ｘ線フィルム、超音波画像、ＣＴフィルム、心電図、血液や尿の検査データ等々を初診時、経過中、治癒後にできるだけ精密にとって、浄霊を主体とした処置方法と照合する。そういった症例を各疾患毎に積み重ね、統計的に処理することである。第２はＭＯＡ九州生命科学研究所やMOA TOKYO 浄院診療所で現に実施しているように、浄霊による施術者、被術者にあらわれる各種の変化、たとえば、血圧、脳波、体表温度分布、体表血流変化、コロナ放電、生物フォトン、生体微震動、ＡＭＩ測定、その他によって日本医術浄霊の効果を検出し、浄霊作用の純粋成分を明らかにしようとする実験である。われわれは決してわれわれの主張を強引に押しつけようというのではなく、もっと謙虚に、これらのデータを通じて医師を始めとする科学者や民衆に浄霊を正しく理解して欲しいという願いをこめて日々これらに取り組んでいるのである。理解された暁には岡田茂吉師の理念のように、浄霊と藝術によって人々の霊の純化と向上が実現され、自然食と相挨って、世界中の全人類が真の健康体となり幸せとなることを信じてやまない。